＜論　文＞

ギリシア人の人間観
―オイディプースを手がかりにして―

後　藤　　淳
人間科学部　スポーツ健康学科
jung510@toua-u.ac.jp

＜要旨＞

ソフォクレスの悲劇『オイディプース王』は，アリストテレスの『詩学』以来現代に至るまでさまざまな解釈を受けてきた。それは，神という形而上的存在の前での人間の無力への悲嘆を，あるいは逆にその中での積極的で肯定的な人間把握への試みを，あるいは政治と人間の相互関係を読み取ろうとするものなどである。

本稿では，悲劇自体への考量は行わず，オイディプース（Οἰδίπους）という人物が体現した「人間」を，より正確に言うならば，彼の言葉－ソフォクレスによる創作であるとはいえ－を介してわれわれに開示された「人間」の原型（パラディグマ）について考える。それは彼の名前が本来の語義である「腫れ上がった足」に加えて，「私は（自分の）足を見た」と解し得ることから，人間が「知る」ということの意味とその妥当性と限界を考察することである。

感覚与件に依拠して先ず認識は成立する。そこに錯誤が介入することは自明の前提ではあるものの，しばしば人間はそれを忘却してしまう。オイディプースのグロテスクな悲劇は，そのことの極端なモデルである。人間の「知」が漸進的に深化するものであるとしても，それが有限「知」でしかありえない以上，「知」への過信は驕慢へと置換され人間の暗部を露呈することになる。オイディプースは自分の足を見ることでスフィンクスの謎を解いた「人間」である。しかし，怒りによる傲慢さによりその存在規定すなわち「禁忌の輪」である限界措定を視界の外にしたとき，大地に立つ確実な足を端緒とした彼の「知」も崩壊したのである。

この悲劇の中にわれわれが読むべき人間の「原型（パラディグマ）」とは，「汝自身を知れ」という格言が説く自己探求による限界認識と，同じく「矩を越えることなかれ」が戒める「知」に驕ることない平静の中で自己を反復探求することであると考えられる。

はじめに

「二本足（διάπους），四本足（τετράπους），そして三本足（τρίπους）の生き物が大地を歩く。それはひとつの声（形）を持っている。大地の上に，空に，海面下に生きるもの中で唯一である。しかし，最大の足数で支えられて歩くとき，それはそれ以外におけるときよりも遅い」というスフィンクスの謎[(1)]への回答は「人間」である。そして，その回答は英雄オイディプースにより与えられた。

テーバイの創始者とされるカドモスから三代後の王ライオスの呪われた子どもとして生まれたオイディプースが，「父を殺し母を妻とする」という運命（モイラ）の実現を回避するべくとった

行為が，逆にその実現の過程そのものとなったという伝説がソフォクレスの悲劇『オイディプース王（*ΟΙΔΙΠΟΥΣ ΤΥΡΑΝΝΟΣ*）』のモチーフである。この悲劇は，意外にも大ディオニュシアス祭における悲劇コンテストでは二等賞であったと伝えられるものの，アリストテレスは『詩学（*ΠΕΡΙ ΠΟΙΗΤΙΚΗΣ*）』の中で何度も引用しながら，それを秀逸なる悲劇の典型（パラディグマ）として賞賛している。

アリストテレスによれば，悲劇とは「一定の長さで完結している崇高な行為の再現（μίμησις τράξεως σπουδαίας）」[2]であり，それは「行為における苦痛の浄化（τὴν τῶν τοιούτων παθημάτων κάθαρσιν）を果たす」[3]ものである。さらに，このような悲劇を成り立たしめる要素のうち，彼は「逆転変（περιπέτεια）」と「発見的認知（ἀναγγώρισις）」を最も重要なものとしている[4]。『詩学』における文脈から，われわれは『オイディプース王』という悲劇がアリストテレスの審査眼を十分に満足させるものであったことを知ることができる。

本稿ではしかし，悲劇としての『オイディプース王』の構成を分析考量するわけではない。アリストテレスによる試論を参考にはするものの，あくまでもオイディプースという人物が体現した「人間」を，より正確に言うならば，彼の言葉－ソフォクレスによる創作であるとはいえ－を介してわれわれに開示された「人間」の原型について考えることを目的とする。「新たに知る」ことが幸福を将来するのか，それとも逆に奈落の蓋を開けることになるのかは，劇の最後でコロスが斉唱する「されば死すべき人の身は，はるかに最期の見極めを待て。何らの苦しみにも会わずして，この世の際に至るまでは，何人をも幸福なる者とは呼ぶなかれ」[5]という悲嘆が聞かれるという点で，古今東西を問わぬ「人間」の有様だからである。

1 「見る」は「知る」

オイディプース（Oedipus）とは，οἰδέω+πούς，すなわち「腫れ上がった足」により象徴される名前である。キタイロン山中に遺棄されるに際して生き延びることのないように両踝をピンで傷つけられた痕跡をもって呼称されたものである。それと同時に，その名前は οἶδα>εἴδω+πούς，すなわち「私は（自分の）足を見た」とも解釈されうるときには，εἴδω 自体に「心の眼を持ってみる」という，言い換えれば，「知る・分かる」という意味があることから[6]，さらに「私は（自分の）足の意味を知った」と読み替えられることになる。悲劇の展開と結末を知っているわれわれにとっては，このオイディプースという名前はそのまま，前者が彼の身体的特徴としての外見的素性を示し，後者が個人のアイデンティティの目印である身体的特徴が担う何かを見て知るという人間の内面的素性を示すものであることになる。

前者の意味について考えてみたい。「腫れ上がった足」を持つオイディプースは，スフィンクスの謎を解くことができたという点で，他に並ぶものなき智者である。謎自体が足に纏わるものであることも意味深長である。

オイディプースの身体的特徴である「腫れ上がった足」は，まさにそれ自体が彼の特徴であり，彼を他の人間から区別するものであることから，人間にとっての身体性という問題を考える端緒となるであろう。それは，最も確実に自分のアイデンティティを保障するモノとしての身体という意味においてである。存在から質料を奪取してしまえば，曖昧とした形而上学的「神」しか残らぬこととなり，人間に関する議論の成立余地がなくなってしまう。オイディプースの足は，あなたの顔や私の目と同様に，彼の足だったのである。スフィンクスの謎が人間の時系列的成長と衰退を表していることに疑問の余地はない。オイディプースは謎を解いたときに，二本足で立つ「人間」だったのである。スフィンクスの謎に回答できないということは，敢えて言うならば，自分の身体について知らぬという無知状態を示すと考えられる。すなわち，最も確実であると思われる自己の身体性についてすら覚知できぬという蒙昧さを示すと考えられる。この意味においては，オイディプースにおいて身体的「人間」という自覚的認識が確定したといってもよいであろう。

足の持つシンボル性についても二点付言したい。「ひとつの声（形）を持ちながら」その足の数が変化するという「人間」規定からは，変化しないものと変化するものの並置が，すなわち同一性－ただし，厳密な意味においてではない－の中

に非同一性が存在するということが示唆されていると考えられる。しかし，この一致は論理的には矛盾でしかない。存在が空間と時間という制約下にある以上，それはあくまでも連続的時間推移の中の一側面を繋ぎ合わせた上で全体を表現したものに過ぎない[7]。しかし，いずれにしても時間的推移に伴って足数が変化するということは，その存在があり様を変化させるということであり，ある時点でのあり様に相即するひとつの性状が顕現するということである。このことは，古代ギリシア人の考えた「アクメー（人間においては40歳頃の最盛期 ἀκμή）」を二本足で立つ人間の最頂点であるとした上で，四本足に始まりそこへ向かっての成長と，そこから三本足を経て死に至る退潮と衰退の身体的変化を考えてみればよい。これが変化するものとしての人間である。

それに対して，足はその数が変わるにしても，常に大地に接する部分である。数を変化させるという点においては，人間は他の動物（空を飛翔するものは脇において）と異なるものの，大地に接するということ，すなわち，大地に縛られているという意味においては，人間も他の動物と異なるものではない。このことが，人間の獣性を説明するものかもしれない。「不死なるもの」や「届かぬところ」という意味を内包する天を仰ぐ頭に対置される以上，否定的な象徴的意味を「足」に読むことができるであろう。オイディプースという名前の意味のうちにある「私は（自分の）足を見た」とは，大地との接触を確認したということであり，そのことは自分が人間であること（人間でしかないこと）を知ったということでもある。既に触れたように，スフィンクスの謎に回答できなかった人々とは，自分が人間であるという自覚にいたっていなかった人々であると，言い換えれば，人間という自己認識に至っていなかった人々であるといえるであろう。足を「見る」ことはすなわち，足を「知る」ということであり，それは自らの何たるかを知ることの出発点であり，同時に到着点なのである。

しかし，見即知でないことは言を俟たない。F. ベーコンが四種の「イドラ（idora）」概念によって示したような認識論的誤謬[8]から単純な見誤りに至るまで，「見たが誤った」という何らかの具体的実体験を持たぬ人はいないであろう。I. カントのいう感覚を通して得た感性的直観は誤謬を含むのであり，仮に範疇による修正を蒙るにしても，純粋知としての認容に耐えることはできないのである。人間知の限界がここにあると考えざるを得ないのである。

2　オイディプースの「知」検証

スフィンクスの謎を解いたオイディプースは，その「知」をもって「神にも等しい（ἰσοθεος>ἴσος+θεός）」人物であると周囲から見做されると同時に，自らもそう自負する人物である。この悲劇は，その「神に等しい」知が，実は「欺瞞的な神（ψευδοθεός>ψεῦδος+θεός）」でしかなかったことが明らかになってゆく過程描写であり，その「知」の意味逆転をオイディプースが自ら遂行する点に悲劇性を読み取らねばならないのである。彼の悲劇性は，上に述べたように，アリストテレスが提起した「逆転変（ペリペレイア）」「発見的認知（アナグノーリシス）」という概念を基軸にしながら，例えば吉田敦彦の述べるように，そこにペロポンネソス戦争に敗北して打ちひしがれたアテナイ人の姿を読むにしても[9]，あるいは J.J. グーのように，人間の心理発達の諸段階を読むにしても[10]，実は真実は違っていたということを知ることが終局でしかなかったということであるだろう。ソフォクレスは『コロヌスのオイディプース』によって盲目となっていたオイディプースをアポロンと和解させることによって，彼が体現してみせた人間的悲惨さを昇華させようとしたのかもしれない。けれども，人間存在自体にとっては，「知」をめぐる問い，あるいは「自己自身」へと向かうという問いは何も解決されぬままなのである。

ところで，ヘシオドスはかつてゼウスとプロメテウスが一頭の牛の「分け前，取り分（μοίρα）→運命」を巡って争った結果，「鉄の時代」を生きる人間は，その生存を維持し続けるために「胃（γαστήρ）」を満たし続けると共に，満たされぬこととなった不死への渇望に苛まれることになったと伝えている[11]。前者は，死に至るまでの生を維持するために食し続けねばならぬというまさに「死すべきもの」としての人間の姿であり，後者は，自己において実現不可能な「不死なるもの」の代

替的実現を意図する性交を通して生を繋ぐ人間の姿に他ならない。特に後者は，擬似的（pseudo）不死をもって「不死なるもの」に自らを擬そうとすることであると見做すことができるであろう。このようなプロメテウス神話において，「先を見通す者（προ+μηθεύς）」である彼の「知」すらも新しき神であるゼウスに敗北したことからするならば，何か完全なるものを想定する限り，たとえそれがプロメテウスの「先見知」であっても，偽りの擬似的「知」に過ぎないことになる。況や「死すべきもの」である人間においておやである。

しかし，足により大地に立つしかない人間であるにしても，それでも天を仰ぎ見ることで他の動物の生とは異なる存在意義を持つことができると古代ギリシア人は考えた。このことは，人間をカントの如く感性的存在者であると同時に理性的存在者でもあるとするのではなく，神と動物の中間者として見做したことから窺い知ることができる。特に，A:B=B:C という類比の中間項に人間をおく幾つかの言表の中にそれを顕著に確認できる[12]。このような神と動物の中間者としての人間規定は，揺れ続ける天秤を担ぐものとして捉え直すことができるであろう。それは，秤の両端に「不死なるもの」への憧憬と「死すべきもの」という現実を，「純粋知」への希求と「相対知」に留まらざるを得ないという現実を，「ヌース」と「胃」を吊り下げた存在ということである。それはまた，中間者である人間に課せられた常に揺れて止まぬ軛かもしれない。このような人間の姿は，オイディプースが自分の父であるライオスを殺害した場所がデルフィから下った三叉路であったことにも暗示的であるだろう。彼の前では，道が二つに分かれていたのである。老人を殺害するのかしないのか，さらにテーバイへの道をとるのかとらないのかという二者択一の中で，彼は片方を選択したのである。このように考えるならば，彼の悲劇は選択の誤りに帰されるのかもしれない。

結果として，オイディプースは誤った。そして，その誤りは「並ぶ者とてない知者」と称される彼をもってしても不可避であった。しかし，われわれは彼の誤りに対して責を問うことはできないであろう。父を殺し母を娶ったという彼の選択の結果に関しては，オイディプースはそれを知らずにいた－老人の殺害は杖もって打ちかかられたことに対する自己防衛の結果であり，王妃を娶ることは王位に付くことに必然的に付帯することである－からである。選択自体こそが不可避だったのである。彼は老人を「見た」のではあるが，その老人の何であるか（＝誰であるか）を知らなかった。彼は王妃イオカステを娶ったのではあるが，その王妃の何であるか（＝誰であるか）を知らなかった。われわれが後付の狡知により彼の誤りを判じ，その責を問う事はできないのである。

さて，「見る」ことが「知る」ことへの端緒であるとしても，「見た」ことが「知った」ことに必ずしも繋がるわけではない。それでは，オイディプースの錯知がわれわれに示唆することは何であろうか。

悲劇の中でコロスは以下のように謳う。

第二スタディオン　旋舞歌その一　＜対歌＞
傲慢さ（ὕβρις）が専制君主
（τύραννος）を生み出す。
もし，正しくも相応しくもない富に
空しく満足するならば，
傲慢さは極みまで高まるも，
必ずや険しい頂上から
足（ποδὶ>πούς）が役にたち得ないような
底へと真直ぐに落とされよう。
（*O.T.* 873-889）

この歌は，いよいよオイディプース自身によって自分の何であるか（＝誰であるか）についての解き明かしが開始される直前で歌われる。アリストテレスのいう「逆転変」の幕開きであり，聴衆にとっては既に承知している惨劇の具現を告げるものである。

僅かに七行ではあるものの，この中には悲劇全体が凝縮象徴されていると考えられる。悲劇題目である『オイディプース王』[13]における「王（τύραννος）」に加えて，「オイディプース」という名を構成する「足（ποδὶ>πούς）」が共に織り込まれているのである。そして，これら二つの暗示的用語が「傲慢さ（ὕβρις）」と共に歌中に用いられている。人を「王」たらしめるものであると同時に，奈落へと転落させる原因として「傲

慢さ」が語られるからである。

古代ギリシア人が考えた人間の「傲慢さ」は二種類であるといえよう。ひとつは神を無視することであり，ひとつは神に挑戦し張り合おうとすることである。それでは，オイディプースは「傲慢」であったのだろうか。彼は自分に課せられた「分け前，取り分（μοίρα）」すなわち父殺しと母との姦淫という二重の「運命」を無視してはいない。それどころかその「運命」を畏んでいる。更に言えば，その「運命」を与えたアポロン神に対しても，決して怨嗟したり悲嘆したりする言葉を発してはいない。その「運命」を甘受しながらも実現を回避するために，彼は養父母の元であるコリントスを去ったのである。「傲慢さ」が入り込む余地はそこにはまったくない。彼の一連の行為はその実現を回避するべく行われたのである。スフィンクスの謎を解けるほどのオイディプースの「知」の中に[14]「傲慢さ」の非を認めるとするならば，「知」への過信をこそ挙げねばならないであろう[15]。眼前に「見る」対象を「知ろう」とすること，そして「知った」と思いなすことが神への挑戦であり敗北であったのである。

自らの出自を探ろうとするオイディプースに向かって盲目の予言者であるテイレシアスが毅然として言い放つ。「申し上げる。目明きでありながら盲目であるとはあなたのことだ。…全く見えないのだ」と[16]。盲目の予言者に見えながら目明きのオイディプースに見えぬこと，あるいは目明きのオイディプースに見えたと思われたこと，それがオイディプースの自負する「知」の内容であった。二本足で確実に立っていると自覚している彼は，次に三本足－杖を助けとすることになる－となる人間であることを忘れていた。皮肉な「知」への過信である。

そもそも「王」とは，その個人の中に「卓越性（ἀρετή）」を見出される存在である。「卓越性」とは，そもそも行為における「勇敢さ」や判断における「先見性」など，類概念に共通する特徴であると同時に同一概念内での個物相互の比較において成立するものである。オイディプースにおいては，他の人間よりも勝るとされる彼個人の「よさ」とは，衆目が認めるのみならず彼自身が自覚している「知の卓越性（γνώμη τῆς ἀρετῆς）」に他ならない[17]。しかし，その「知」をもって行う戦いの過程が過信により曇るとき，彼は「傲慢なる王（βασιλεύς ὑβριστικός）」，すなわち「専制君主・僭主（τύραννος）」としての位置付けを受けることになったのである。しかし，上にも述べたように，彼に帰される「傲慢さ」は，その責を彼には帰することができないのではないだろうか。

古きギリシア人たちがその中にいた伝統的な神観に比すれば，この悲劇が演じられた前五世紀後半時点[18]でのギリシア人たちは脱伝統的な神観に触れていたと考えられる。彼らは，ホメロスやヘシオドスが謳ったような，ある意味では「人間臭い」神々のあり方をそのまま受け入れるのではなく，天文学や哲学的思索の結果として再構築された神概念[19]に触れていたと考えられる。しかし，ペルシア戦役における勝利による高揚期が過去のものとなり，ペロポンネソス戦争開戦という危機的状況の只中にあったアテナイの人々にとっては，この悲劇は再び「人間」の悲惨さ，無力さ－一言で言えば，国家を含む人間的営為に対して抱く「一寸先は闇」という虚脱感といえるだろう－を喚起せしめたと推測できる[20]。

それでは，オイディプースが「神」に敗北したという神話の中に，あるいはそれをテーマとするこの悲劇の中に，われわれは人間「知」の無意味さや卑小さのみを読み取らねばならないのであろうか。

3　自己解明あるいは自己啓蒙

オイディプースは自らの「知」をもって全力で戦った英雄である。相手は不合理なる自分の「運命」であった。自らの何であるかが自分の与り知らぬまま神により「分け前」として与えられているという不条理の中でも，その理不尽さに対して単に怒るあるいは嘆くのではなく，冷徹にその忌避を目指すも果たせぬまま，逆に「分け前」の回避ができぬということを示してしまった英雄である。

彼の戦いは自己探求であった。自己を探求することにおいて出自を探ることに拘泥することは，われわれにとっては一顧だにしないような瑣末なことである。自分の親や係累との関係を自明であ

ると考えているからである。人間の生死において，死を選択することはできても生を選択することはできない。人間は，自分の親や場所・時代を選んで生を開始するわけではないというK.ヤスパースの「限界状況」「歴史的必然」という制約状況から逃れることができない[21]。そのように自己存在を問うことなく眼前に展開する事象を「見て」「知った」と思いなして時間の中に身を置くことが，「生きている」ということであるだろう。

しかし，オイディプースは違った。スフィンクスの謎に対して「人間」と回答することにより，彼は概念としての「人間」を把握することはできたのかもしれない。しかし，彼の悲劇は，問いに対して解答が与えられる否や，更にその回答とは何か－「人間とは何か」という問いに対する回答は困難を極めるのではあるが－という次の問いが不可避的に成立することに気づかなかったという点にある。

「見る」から「知る」へと移行しながら知見を拡大することが人間「知」の漸進であるならば，それは量的「知」に留まらざるを得ず，質的「知」を保証することができない。辞書的知識を増やしてみても知恵に至らぬということである。仮に「知」の量を誇るとすれば，それは忽ち「傲慢さ」という陥穽に陥ることになってしまう。先の比喩を用いるならば，それは揺れる天秤の片方のみを「見る」ことに満足することかもしれない。オイディプースは自分の「知恵」を自覚する人間であった[22]。しかし，彼を典型（パラデイグマ）とするならば，「知」を求めることやそれに信を置くことは人間にとって無意味であるだろう。ここで，「知」を渇望することや自己探求を試みることは，人間にとって禁忌の扉に手を掛けることであり，自己破壊をもたらすことであるかもしれぬという恐れが生じる。

自然的なすなわち質料的な対象に向かう「知」は，帰納的解析をいかに進めるにしても有限の中での真理しか得ることができない。それは，鉤括弧を外すことのできない真理である。また，形而上的なすなわち非質料的な対象に向かう「知」は，理性の演繹的思弁をいかに要請してみても，自己存在の有限性再認に回帰することになるであろう。それは，不可知論を成立せしめるような，自分が所詮人間でしかないという悲嘆に終わるであろう。この意味においては，オイディプースの敗北は敗北に他ならない。いずれの対象に向かう「知」であっても，不完全さを払拭できないままに留まらざるを得ないからである。それでは人間が「知」を目指そうとすること自体－それは認識への根源的志向と言い換えることができるであろう－は，あたかも釈迦牟尼の掌を駆翔する孫悟空の如き錯覚内での自己満足に過ぎないのであろうか。

人間にとって，時間と戦うことが生きるということであるだろう。『オイディプース王』の中でもコロスが「時」を歌う。

第四スタディオン　旋舞歌その二　＜対歌＞
すべてを見通す時（ὁ πάνθ΄ ὁρῶν χρόνος）は，あなたの意思に反してあなた（の素性）を暴いてしまった。　（*O.T.* 1214）

人間は「時」との戦いに勝利することはない。最も過酷であると同時に自明なこの事実に対して，しかし，人間は「知」の漸進的進歩を肯定的に評価付けることによって抗おうとしてきた[23]。「知らなかったことを知った」とか「分からなかったことが分かった」という言葉によって自分の「知」に対する補償を得てきたといえよう。このようなあり方を「自己満足」とするか，それとも「自己充足」とするかによって，「時」に対する身の置き方は異なるであろう。前者はより積極的な，後者は控え目な「知」への信奉であると考えることができるからである。デルフィのアポロン神殿に掲げられた格言である「汝自身を知れ（γνῶθι σαυτόν）」も「矩を越えることなかれ（μηδὲν ἄγαν）」[24]も，「時」に正対して自らの有限なることを常に想起することを人間に求めたものであることからするならば，自己の「知」に対する二つの姿勢のいずれにおいても，前提としての限界が設定されていることを人間認識は甘受せねばならないのである。『オイディプース王』という悲劇がわれわれに教唆するものは，観衆の現前で演じられる英雄オイディプースの個人的暗転というレベルから，それを「見る」－あるいは「読む」でも「聞く」でも構わない－私が自分と対話することによって得る自己認識のレベルに至るまでさ

まざまであるだろう。「知」に驕ることない平静の中で自己を反復探求することが求められていると思われる。

最後に，吉田が論じているような，オイディプースの苦悩の中に人間の「尊厳と自由をみる」という解釈について付言しておきたい。彼は「人間はたしかに，徹底して惨めで不自由だが，なお意志さえすれば何ものによっても犯されず守り続けることができる，最小限の尊厳と自由を持っている。そして，オイディプースは，神が彼のために不可避の運命として定めたまうた現実の過酷きわまる不条理に耐え，あくまでその尊厳と自由を守り通した」(25)と述べ，この悲劇自体を「…もっとも極端な悲運に苦しめられ，悲惨のどん底に突き落とされても，人間にはなお守ることのできる自由と尊厳があり，繁栄の絶頂にあって偉大で高貴であり得る人物は，失意のどん底にあってもやはり偉大で高貴であり続け得ることを，オイディプスのパラデイグマによって示した，人間への実にしぶとく逞しい讃歌でもある」(26)と評している。

いささか面映くはないか。引用箇所が古代ギリシア人の人間観について述べる文脈にあるとき，サテュロス劇やアリストファネス喜劇の人物が体現してみせる人間の卑俗さや卑近さを対立価値とする必要があるだろう。人間が担う天秤の両端には必ず対立的価値が措定されるのであり，「聖」と「俗」という組も考えねばならない。「尊厳と自由」に対する「卑俗と制約」について忘れてはならないと考える。吉田の述べる「尊厳」とは，慎重な反復反省に裏付けられた自己探求「知」の漸進を留保しうるということであり，「自由」とは，「時」の制約下にあることを踏まえた「知」の取捨選択と修正を遂行できるということであるだろう。

テキスト

○Sophocles. *ΟΙΔΙΠΟΥΣ ΤΥΡΑΝΝΟΣ*. ed. and trans., by H.Lloyd-Jones. Loeb Classical Library. Harvard U.P. 1994.（本文並びに注において *O.T.* と略）

○ソフォクレス『オイディプース王』岡道男訳．ギリシア悲劇全集 3. 岩波書店．1990.

○ソフォクレス『オイディプース王』高津春繁訳．ギリシア悲劇全集Ⅱ．人文書院．1982[2].

○ソポクレス『オイディプス王』藤沢令夫訳．岩波文庫．1973[9].

注

(1) Athenaeus. *ΝΑΥΚΡΑΤΙΟΥ ΔΕΙΠΝΟΣΟΦΙΣΤΩΝ*. X.456 b5-10. ed. and trans. by G.P.Goold. Loeb Classical Library. Harvard U.P. 1996[5].

(2) Aristoteles. *De Arte Poetica Liber*. VI,1449 b24-25. ed. by R.Kassel. Oxford Classical Text. 1988[8].

(3) Arist,. ibid. VI,1449 b27-28.

(4) Arist,. ibid. XI,1452 a20-33.
「逆転変」については 1452 a20-27 において，「発見的認知」については 1452 a27-33. において説明される。前者は，行為の結果が「必然的帰結（κατὰ …. ἀναγκαῖον）」として行為の成り行きとは逆転してしまうことであり，後者は，何も認めていない状態から何かを発見して認める状態へと意識が転換することである。アリストテレスは，これら悲劇成立の二大要素について論述する際に，その顕著な例として『オイディプース』を引き合いに出している（但し，彼は Οἰδίπους と述べて Τύραννος を付加していない。注 13 参照）。

(5) *O.T.* 1527-1530.

(6) H.G.Liddle & R.Scott. *A Greek-English Lexicon*. Oxford. 1968. p.485.

(7) エレアのゼノンによる無限分割論理を想定すればよい。

(8) F. ベーコン『ノヴム・オルガヌム』「自然の解明と人間の支配についてのアフォリズム（第一巻）」桂寿一訳．岩波文庫．1978. pp.52-65.

(9) 吉田敦彦『オイディプスの謎』講談社学術文庫 . 2011. pp.174-226.

(10) J.J. グー『哲学者エディプス　ヨーロッパ的思考の起源』内藤雅文訳 . 法政大学出版局 .2005. 特に第 2 章「精神分析と殺人」並びに第 4 章「三重の試練」参照。

(11) 神と人間との「モイラ」については，Hesiodos Θεογονια . ll.535-564.「鉄の時代の人間」については，*Εργα και Ημεραι* . ll.174-201. in *The Homeric Hymns and Homerica*. Loeb Classical Library. Harvard U.P. 1967.

(12) DK.22 B.82,83.（ヘラクレイトス断片）

(13) この悲劇の題目については単に『オイディプース』であったが，後に『コロヌスのオイディプース』と区別するために「王」を加えたと考えられている。古代ギリシア人たちがオイディプースの中に「王」の一般的名辞である βασιλεύς ではなく τύραννος（専制君主･僭主）を見て取ったということであろう。それは，τύραννος の要件である「傲慢さ」をオイディプースの中に見て取ったということである。

(14)「私は自らの知恵（γνώμῃ）によって謎の答を得た」 *O.T.*398.

(15)「傲慢さ」が人間自身に入り込む背景に「怒り（θυμός）」を挙げることができる。劇中では自分の「知」を過信するオイディプースに向かって，クレオンは「（怒りにより）思慮が狂ってしまっている」*O.T.* 626. と，コロスは「（怒りを静めて）あなたが意志と思索に従いますように」*O.T.* 649-50. と述べている。

(16) *O.T.* 412-414.

(17) *O.T.* 40-57.

(18) 研究者たちは『オイディプース王』の制作年代を前 430 年前後としている。

(19) 特に前ソクラテス期の思想家たちによる伝統的神概念批判と新しき神概念の創出において顕著である。
DK.21 B.23,24.25.26.（クセノファネス断片）
DK.31 B.115.133.134.（エンペドクレス断片）
cf: DK.59 A.1.（*D.L.* II.10. によるアナクサゴラス学説誌）
DK.68 B.68.（デモクリトス断片）
ソフォクレスと同時代を生きたプラトンの中期対話篇において用いられる神に対する名称も，イデアあるいはエイドスとの近接を説くための方途であり質料性を奪われている。さらに，後期『ティマイオス』篇におけるデミウルゴスにいたっては新しき神と見做すことができるであろう。
cf: G.S.Kirk. *Griechische Mythen. Ihre Bedeutung und Funktion*. Augsburg. 1974. pp.156-159, 215-216. カークはあくまでもオイディプース神話を伝統的神観の中に位置付けているが，それは彼が古い世代の神話が新しいギリシア人たちに与えていた影響を論ずる文脈においてである。

(20) この悲劇が当時のアテナイ人たちに与えた意味を，特に「政治上のダイナミズム」という言葉を使いながら，「政治のリーダーですら欠陥を持った不運な人物に過ぎない」と強調する解釈もある。Th. ケイヒル『ギリシア人が来た道』森夏樹訳 . 青土社 . 2005. p.181-184.

(21) K. ヤスパース『哲学』Ⅱ「実存解明」鈴木三郎訳 . 理想社 . 1961. pp.231-288.

(22) 注 13 参照。さらに，劇中のオイディプースは頻繁に「私は知っている」と口にする。

(23) DK.21 B.18.（クセノファネス断片）
DK.31 B.106.（エンペドクレス断片）
cf: DK.68 B.40.（デモクリトス断片）

(24)「矩を越えること」すなわち「度を過ごすこと」とは，平衡からの逸脱に他ならない。積極的意味においては，緊張感や意志により過剰なエネルギーが横溢することにより惹起することであるだろう。同時に，否定的に捉えるとすれば，眼前の何かに拘泥することにより生命力が枯渇することによる平衡の崩壊とも考えられないであろうか。

(25) J.P. ヴェルナン，吉田敦彦『プロメテウスとオイディプス－ギリシア的人間観の構造－』p.124. みすず書房 . 1978.

(26) 同上 . p.135.

Human Paradigms in Ancient Greece
—Oedipus as its Clue—

GOTO Jun

Faculty of Human Sciences, Department of Sport and Health Sciences
University of East Asia
jung510@toua-u.ac.jp

Abstract

Sophocles'Tragedy *Oedipus Tyrannus* has been variously evaluated and appreciated since Aristotle. In this tragedy some found the human incompetency in front of metaphysical God, and others the relationship between politics and the man.

The analysis of drama-plots is not intended in this article. Instead, human paradigms described in Oedipus'deeds and words exaggeratedly in this drama are to be considered. Hints are included in his name Oedipus, as it could have dual meanings 'crooked feet' and 'I saw (my) feet'. They enables us to have an awareness that our wisdom should be valid but limited.

Human recognition is firstly based on sense data. Although it is a clear fact that sense data should contain some kinds of errors, we often forget it. The grotesque case of Oedipus is a typical one. Our knowledge could be gradually deepened as we come to know more, but the overconfidence of knowledge would be replaced with arrogance. The possibility of degradation is anytime and anywhere around us. Oedipus was a wise man who could solve the enigma of Sphinx by his own wisdom. But even his wisdom which was founded on his foot was completely collapsed by the arrogance slipped through the anger.

The human paradigms we should pick up in this drama are: that the awareness of knowledge should have the limited boundary by way of self-research as the Greek maxim "Know Thyself" says, and that the self-research should be done repeatedly in reasonable calmness as "Not Too Much" prohibits.